第一章

　小さな小窓から朝日が入ってくる。

　朝日は壁や床を照らすでもなく、起きろとでも言うように寝ている俺の顔を照らす。

　いい眠りについていた脳が、邪魔され無理やり起こされる。

「th……」

　寝起きのためか、口から日本語にするには難しい、英語の発音のような呻き声が漏れる。

　そのままの姿勢で目を開けるが、いつもの天井は見えない。

　見えているのは部屋の戸や壁。

　一瞬俺が寝ぼけているのか、ただ単に横を向いているだけかと思ったが、そうではない。

　俺の身体は床に対して水平。

　顔の向きも真っ直ぐになっている。

　それなのに、天井が見えないのはおかしい。

　だが、見えないのはいつものこと。

　俺の寝起きの姿勢が異常だからだ。

「首痛ってぇ～」

　身体を起こし首をりながら呟く。

　壁に後頭部を密着させ、首は垂直。身体を床に投げ出したような、説明するには難を要する変な体勢。

　そのため、壁や戸が見えるし、首も痛める。

　どうしてこんな変わった寝方をしているか自分でも分からない。

　自分では普通に枕の上に頭を乗せて寝ているが、朝、目が覚めると、この体勢になっている。

　この現象は今日だけではない。

　ここ１０年近くずっとこの変な体勢になっている。

　最初の頃は、痛いし、不思議で、寝不足になるくらい気になっていたが、２、３年経った頃には痛み以外はあまり気にならなくなった。

　慣れというものは怖いものだ。

　ある程度、首を摩って痛みが和らいできたところで、そろそろ布団から出ることにする。

　まだ肌寒い朝には、布団から出たくないと身体が拒否反応を起こす。が、時間がないため、布団に戻りたいという欲求を押さえ込み、渋々布団から出る。

　すると、俺の目は自然と、壁にかかっている服にいく。

　藍色のチュニック。

　襟の右側には学年である１の英数字の学年章がつき、他には何もついていないシンプルな制服。

　もちろん新品。

　今年の３月上旬に隣町にあるミハルヤというデパートに、徒歩で往復１時間半かけて買ってきたものだ。

　そう、今日４月１０日は、月虹学園高等学校の入学式。

　この俺、越前仁が高校生になる日なのだ。

　そう意識すると、入学式特有の不思議な感じのせいか、寝ぼけていた身体がシャキっと完全に目覚めたような気がする。

　その証拠に、布団に戻りかけていた、足が止まり、布団から距離をとっていた。

　危ない危ない、二度寝という悪魔の罠に嵌ってしまうところだった。

「誘惑に負ける前に、着替えるかな」

　制服に近づいて行き、寝巻きの半袖短パンから、新品独特の変わった匂いがする制服に着替える。

　少し大きく、がほがほしている感じがする。

　部屋に設えている姿見で一応確認。

　袖が手首より何センチか長く、肩の部分もぶかぶかしている。

「あ、でも、なんか俺いけてるんじゃね？」

　確かに大きいが、なんかしっくりきている。

　意外と俺は、制服が似合うようだ。

　中学のときは、制服があんまり似合うとは思わなかったが、やっぱり俺もちゃんと成長してるんだな。

　そんなことをしているうちに、どんどん時間が過ぎていく。

　多分俺が起きてから、５分近く経っているだろう。

「そろそろ行かないと、遅刻するな」

　この部屋には時計はないが、なんとなく時間は分かる。

　今の季節の朝で、朝日が俺の顔に当たるのは８時を超えてる証拠。

　これは急がないとやばい。

　机の上に置いておいた、筆記用具が入ったリュックサックを肩に掛け、脱いだ寝巻きを持って部屋を出る。

　刹那、俺が引き戸に手を掛けたところで、聞きたくなかったものが聞こえる。

キョケキョッキョー！

　甲高い鳴き声のような大きな音。

「なっ！？　やばっ！」

　その音が止むなり、急いで部屋を出る。

　出た勢いのまま、結構長い渡り廊下をダッシュする。

　これはやばい、こんなにも時間が経っていたとは思ってなかった。

　今聞こえたのは家で飼っている鶏の鳴き声。

　家には１２羽の鶏がいるのだが、今の鳴き声はその１２羽の中の１羽、８号の翔鸞楼の鳴き声だ。

　見た目はどこにでもいる普通の鶏なのだが、普通の鶏とは違う。

　普通の鶏は朝日が登ってくる頃に鳴くはずなのだが、８号は朝日で鳴かず、変わった時間に鳴く。

　それは、８時２５分きっかり。

　これから行く月虹高校の登校時間は８時３０分まで。

　つまり俺は、遅刻の危機に立っているのである。

　入学式の日から遅刻とは、いろいろとやばいだろう。

　長い渡り廊下を抜けた先にある、竹製の洗濯籠に寝巻きを放りこみ、その横にある洗面所に流れるような動きで入る。

　そこでいつものように顔を洗い、歯を磨き、ボサボサの髪をできるだけ整える。

　この髪を最後まで直していたら、大きなタイムロスになるため、整えるだけにし、さっさと迎えの居間に入る。

　２０畳ぐらいはある広い居間。

　いつもは、お茶を飲んだりして寛ぐのだが、今はそんなことをしている時間はない。

　居間の中央にポツンとあるには、使った形跡のない、鍋がかかっている。

　その中には俺の朝食にして、毎日のように食べている、フランスパンが入っている。

　囲炉裏の近くにはいつものように、小さな紙切れが置かれ、綺麗な字で『朝食』と書いてある。

　いつもながら、朝食を用意してくれるのはありがたい。

　俺はそのフランスパンを片手に居間を出て、玄関に向かう。

　玄関には俺の靴以外に靴は見えず、ガランとしているところを見ると、あいつはもう学校に行ったんだろう。

　俺も急いで学校に行かなければ。

　自分の靴を素早く履き、無駄に広い玄関を出る。

　太陽の光が俺の顔を照らし、朝の涼しげな風に乗って、微かに春らしい花の香りが漂っている。

「いい天気だな」

　いい天気すぎて、ゆっくり行きたいが、そんなことをしていたら遅刻をしてしまう。

　俺は一瞬止まってしまった足を、自転車がある家の小屋に向け走る。

　家の横側の方にあるが、玄関よりにあるため直ぐに見える。

　小さな小屋。

　その中からいつもどおり白い自転車を出す。

　家から学校の距離は意外と近い。

　それはというと、俺が行く学校の裏には檻須袈山というでかい山がある。

　その山の中間付近に俺の家がある。

　そのため、学校は目と鼻の先だが、それは見た感じで、実際は急な長い坂があるため歩きだと結構時間がかかるのだ。

　鞄を自転車の籠に放り込み、片手運転は危険なためフランスパンを咥え、両手を空ける。

　スタンドを軽く蹴り上げ、跨ってさっそく出発する。

　ここまでにかかった時間は多分２分くらであろう。

　家と学校の間に長い坂があるが、幸い自転車を使えば２、３分で着くはず。

　このまま行けばギリギリだが間に合う。

　そう確信して、いつもどおり急な下り坂を下って行く。

シャー

　風を切り、俺の自転車は進む度にスピードが上がっていく。

　この調子なら、間に合うだろう。

「今日も調子がいいな自転車（ペガサス）」

　と呟き（ツイート）しながらフランスパンを齧る。

　フランスパンのパリッとした表面の皮の鳴る音と、パン特有の小麦の味が口の中に広がる。

「やっぱりフランスパンは美味いな」

　いつもそう思っているが、天気のいい日にこうやって、風を浴びながら食べるフランスパンは格別だ。

　フランスパンを頬張りながら下り坂を下る。

　すると、３口食べたところで異変に気づいた。

ヒュオオオオー

「ん？」

　変な音が聞こえる。

　何かが風に当たっているような、何とも例え難い音が小さくではあるが、確かに聞こえてきた。

　俺の耳は結構良い方で、自転車の走行音の五月蝿い中でも聞き取ることが出来た。

　こっちに向かって来ている様な、そんな音。

　意識を半分だけハンドルに集中させながら、耳を立てる。

ヒュゴオオオオー

「あれ？　さっきよりも音が大きく……」

　変な音はどんどん大きくなっていき、さっきよりもこっちに近づいているような気がする。

　左右、前後を見てみるも変わったものは見えない。

　だが、音はまた大きくなっている。

　もう一回耳に集中する。

「ん…………………ん？　上から？」

　音が大きくなったことにより、それが上からということに気づく。

　首を垂直まで曲げてみる。

「おいおい！　なんだよあれ！？」

　何か分からないが、塊のようなものがこっちに向かってきている。

　でもそれはありえない。

　その塊がどういう落ち方をしているか分からないが、こっちは自転車に乗って猛スピードで坂を下りているのだ。

　絶対に追い越して、俺が振り返って見るような感じになるはずなのにそれは、まるで糸か何かでくっ付いているかのように、俺の上から動かない。

「当るものかー！！」

　避けるためにペダルを早める。

　が、それはどんなにスピードが上がろうと、ぴったりとくっ付いてくる。

　そうこうしているうちに距離は縮まっていく。

「ちくしょーーーーー！！」

　叫ぶも距離が離れることはなく、５ｍを切る。

　そこで、この距離に達して、ようやくそれが何かわかった。

「女？　の子？」

　だが、それが少女だと認識したときにはもう遅かった。

ヒュン、ガシャーン！！！！

「うが！？」

　落ちてきた少女は、俺が咥えているフランスパンの先を掠めて頭から自転車の籠に突き刺さった。

　突き刺さったというか、籠に穴が開き、髪の毛が網目に引っかり、嵌っている。

　髪が引っかかろうと、身体が運動力により、こっちに倒れてくると思ったが、彼女は直立のまま、岩に突き刺さった銛のようにビクともしない。

　それはというと、何故か彼女は今まで冷凍されていたマグロのように凍っているからだ。

「じ、自転車がぁー！！」

　突然起きたことに驚きのあまり発狂してしまう。

　籠のほかにも衝撃で前輪が半壊する。

　そのため、タイヤが回転せずゴムが磨り減って、やばそうな音が響き、車体が揺れる。

シュルルルルルルルルルゥ！

　まだ頭の中はパニックだが、このままでは、俺も自転車も彼女も危険だということだけはわかる。

　まずはバランスの取れない、この乗り方を変えなければ。

　バランスを取れない１番の原因である彼女を籠から引き抜きにかかる。

　だが、俺の体勢が悪いせいか、深く刺さっている彼女の頭は簡単には抜けない。

　その間にも自転車が変な音を経て、ぐらつきながら山道を下っていく。

　どうしよう……。

「あっそうだ！　ブレーキ！」

　何も考える必要はない。

　自転車には元からすばらしい、安全装置がついているではないか。

　ブレーキレバーに手をかけ、おもいっきり引く。

　前輪が半壊し、ブレーキどころではなくなっても、まだ後輪が生き残っている。

　本当は一気にレバーを引いてはいけないのだが、後輪だけなら大丈夫だろう。

カチッカチッカチッ

あれ？　あれ？　あれれ？」

　何度もブレーキをかけてみるが、まったく反応がない。

「え？　嘘だろ……なんで……あっ！！」

　疑問に思い、ハンドルのブレーキレバー付近をふと見てみる。

　ブレーキをかけるためのワイヤーが、レバーから外れている。

　彼女が落下してきた際に取れたのだろう。

　ははははははっ。

「嘘だろぉーーー！！」

　あまりに不運すぎる出来事に、発狂する。

　だが、発狂しようと自転車は止まらない。

　それよか、回転しない前輪でもこの急な山道を下っているせいか、最初の時よりも早くなっている。

　不安定なバランスには奇跡的に慣れてきたが、このままというわけにはいかない。

　ブレーキレバーが効かないということは、止まれないということ。

　止まれなければ、この早さだ、何かにぶつかったりしてしまったら無事にはすまないはず。

　と考えていると、周りの景色が変わっていき、いつの間にかコンクリートで舗装された、山道の出口に出てしまった。

「畜生、こうなったら足で止めるしか……」

　レバーをうしない、何かにぶつかって止まろうにもこの早さでは死んでしまう。

　だったらもう、１５年間ずっと一緒に育ってきた、この足で止めるしかない。

　俺は足をおもいっきりコンクリートに叩きつける。

　あまりの早さに叩きつけた足に少々痛みがくるが、そんなこと気にしている場合ではない。

　俺は叩き付けた足を突っ張り棒のようにして踏ん張る。

　すると、靴底が減っているような音とともに、少しずつ自転車が減速していく。

「よし、このままいけば……ふぬぬぬぉぉぉ！！」

　減速してきているが、学校までの距離は近くなっている。

　俺は踏ん張っている足に全ての力を集中する。

　それがきき、さっきよりも減速し、普通の早さに戻っていく。

　だが、止めることに集中していた俺は前を見ておらず、目の前にある電柱に気づかなかった。

ガッシャーン！！！！！！

「ゲフッ！！」

　前に電柱があることにもちろん気づかず、俺は盛大に電柱に激突する。

　先程よりも遅くはなっていたものの、かなりの早さでぶつかってしまった。

　そのため、ぶつかった反動により自転車と一緒に後ろに吹っ飛ぶ。

「いてててて……」

　畜生……、なんて不幸なんだ。

　今までこんなこと起きたことなかったのに、今日はもしかして人生最大の何かが起こる日なのか？

　いや、すでに起きているんだが。

　まだなにかありそうな気がする。

　吹っ飛びはしたがどうやら俺は無事らしい。

　衝突したのが自転車のタイヤ部分だけだったためか、タイヤ以外怪我は無いようだ。

　横になった自転車を起こし、地面に打った頭を摩る。

　自転車はタイヤがまたもや変形し、ぐちゃぐちゃになっている。

　こんなタイヤを見るのは初めてだ。

　それでも、あの早さで衝突して、タイヤが変形しただけで済んだのは不幸中の幸いだろう。

　ようやく止まることができた俺は、彼女を自転車から引き抜こうと、籠に手をかける。

　すると、校舎の方から何か聞こえてくる。

キーンコーンカーンコーン

　大きなチャイム音が、学校の敷地外にも響き渡る。

　８時３０分を告げる予鈴。

　そのチャイムと共に、用務員とおもわれる作業着姿の人が黒くでかい、柵を引いて門を閉めようとしている。

「あ、そうだ！　こんなことしてる場合じゃなかった」

　自分が遅刻寸前だったといことをすっかり忘れていた。

　まだ彼女が刺さっているが、柵はもう半分も閉まり、抜いている暇はない。

　俺は彼女が刺さったままのボコボコな自転車を引いて、『月虹高等学校入学式』という看板のついた校門を通りすぎ、ダッシュで学校内に入る。

　作業着のおじさんが柵を最後まで閉め、頑丈そうな鍵をかけ、何も無かったように去っていく。

「はぁはぁ……ま、間に合ったぁ」

　ぎりぎりだがなんとか遅刻せずに、学校についたことに安堵する。

　それにしてもあの作業着の人、よく無反応で帰れたものだ。

　俺だったら２度見、３度見して驚いてあたふたしているだろう。

「あ、そうだ。早く教室入らないと」

　遅刻せずに済んだものの、教室にいなかったら結局遅刻あつかいだ。

　俺は自転車を止めるため、自転車が沢山置かれている、校舎の横の駐輪場のようなところに向かう。

「ちょっと、そこの君」

　背後の方から声が聞こえる。

　隣や前方を見てみるも誰も見当たらないところを見ると、多分俺に言っているのだろう。

　声のした後方を見てみる。

　そこには、少し高めの身長、つやのある黒髪ロングヘアを靡かせ、頭に紅葉の形をした髪飾りをつけた少女が、眼鏡の優等生のような５人のお供を連れて立っていた。

　しかも吊り上った目で俺を睨んでいるように見える。

　いったいこんな綺麗な人が俺に何の用だろうか。

「えっと……俺のことですか？」

「そうよ、そこの自転車を押している寝癖のついた君のことよ。あなた以外に誰がいるっていうの」

　一応聞いてみたのだが、ここまで言われるとは思ってなかった。

　俺本当に何か怒らせることをしてしまったのだろうか。

「君、新入生かしら？」

「そうですけど……な、なんでしょう」

「ふむ、君時計持ってる？」

「いえ、持ってないです」

「そう、なら校舎のあの時計を見てみなさい」

　そう言うと怒り気味の人は校舎に取り付けられた、でかい時計を指差す。

「８時半？」

　俺がそう応えると起こり気味の人は首を横に振り、ため息混じりに話してくる。

「違うわ。８時３０分３０秒よ。そして、あなたがここに着いたのは、８時３０分１０秒。つまりあなたは１０秒も遅刻したの」

「３０秒って、あの時計に秒針なんてないありませんよね。当てれるわけないじゃないですか」

「たとえ秒針がなくても、心の秒針で答えるのよ」

　この人は何を言っているんだ？

　心の秒針ってそんなのあるわけないじゃないか。

「そんなの出来ないですよ」

「じゃあ私が手本を見せるわ。田中！」

「はい」

　怒り気味の人は後ろにいる眼鏡の集団に声をかけると、目を瞑り、学校の時計に背を向ける。

　そして、田中であろう眼鏡は懐から懐中時計を２つ出して、１つ俺の方に渡してくる。

　もう１つは田中自体が持ち、懐中時計を食い入るように見つめている。

　まさか、時計を見ないで時間をあてるというのか、そんなの無理に決まっている。

　身体を人造人間のように改造されているならできるかもしれないが、普通の人間がそんな芸当できるわけがない。

「８時３１分５秒、６、７、８、９、１０……１５」

　怒り気味の人はいきなり時間を言い出したかと思うと、続けて数字を言っていく。

　俺はまさかと思いも直ぐに手元の時計を見る。

「ぴ、ぴったり……」

　秒針がこの人が言ったとおりに、進んでいく。

　しかも全然ずれていない。

「さすがです会長、いつもどおり１秒もずれてないですよ。会長の身体時計」

　驚いている俺とは裏腹に、眼鏡の田中は当たり前のように告げる。

　それに反応して、怒り気味の人は振り向き、「ほら、出来たでしょ」と、ドヤ顔のような表情をこちらに向ける。

　確かに時間をあてることができてはいるが、それを俺にもやれというのは無理な話だ。

　それにこんな芸当は俺以外にも求めても無理だろう。

　すると、こちらが唖然として何も話さないのを見てか、先に話しをかけてくる。

「ざっとこんなものね。それじゃあ話しを戻すけど……」

　ん？何の話だ？何か話していただろうか。

　あまり見ない光景に驚いて、忘れてしまった。

「あなたは８時３０分１０秒に登校した。つまり１０秒も遅刻をしたということよ。これは大きな罪だわ」

「な……」

　１０秒。分ではなく秒。カップラーメンもお湯を注いだだけで、まだまだ食べられない時間。

　普通であればあまり気にしないはずの１０秒だ。

　あまりに細かいことに俺も反論をする。

「別に１０秒くらい大目に見てくれても……」

「くらいではないわ。１０秒もよ。うちの学校は何か特別な理由がない限り、８時３０分までに登校と決まっているの。生徒手帳にも書いてあるわ。つまりあなたは遅刻したのよ。そこのところわかっているのかしら？」

　またも細かく言われるとは思っていなかった。

　なんとか間に合ったと思っていたのに、これでは遅刻になってしまう。

　何か反論せねば。

「だけどあれですよね？あの柵が閉まるのは８時半ですよね？」

「そうよ」

「俺あの柵がしまう前に入ってきたので、セーフになるんじゃないですか？」

　そう、俺はちゃんと柵が閉まる前に校内に入った。

　間違えない。

　ふむ、これで彼女も反論はできないだろう。

　俺は内心ガッツポーズを取る。

「いいえ、あなたは遅刻よ」

「な、なんでですか。俺は……」

「なぜならあの用務員の米谷源蔵さん、通称米さんは、今年で８０歳になるご老体だから閉めるのが遅いのよ」

「何ご老体に働かせているんですか！？　ゆっくりさせてあげましょうよ！」

「米さんは好きで働いているの。そんな人から仕事を取るわけにはいかないでしょう。よってあなたは遅刻よ」

「うぬぬ……」

　もう無理だ遅刻だと認めるしかない。

　そんなに頑張っている米さんを、責めることは俺にはできない。

　だが、さっきから気になっていた、後ろの眼鏡お供５人はなんなんだろう。

　怒り気味の人が何か言うたびに、コクコクと頷く動作が、見ていてすっごいウザい。

　こんなやつらをお供にしているこの人も何なんだろう。

　少し強めの口調で細かく注意して、ここまで、正論を並べるとは。

「遅刻したのは認めます。ですが、さっきからお説教みたいなこと言っているあなたはいったい誰なんですか？」

　怒り気味の人は呆れたようにため息をつき、話始める。

「あなたのかけているその眼鏡は飾りなのかしら？　それにここまでの動作を見れば誰でも分かると思うのだけれども」

「ん？」

　そう言われ、見てみるも変わったところは見当たらない。

「はぁ、私はこの月虹高等学校３年Ａ組出席番号１番、槭よ。生徒会長をやっているわ。ここを見れば分かると思うけど」

　そう言うと生徒会長さんは、左腕に生徒会長と書いてある腕章を誇らしげに見せ付けてくる。

　確かに言われてみると、威風堂々としたその姿が、生徒会長なのだと言わんばかりに生徒会長らしさを出している。

　なるほど、ということはあの眼鏡５は生徒会役員か。

　生徒会長だったのか、少し失礼だったかな。

「まぁ新入生ということで、今日のところは見逃してあげる。だけど次遅刻したら、ただじゃおかないから」

　どうやら助かったらしいが、次に遅刻したら何をされるんだろうか。

　本当に気をつけよう。

「は、はい気をつけます。では俺はこれで……」

　素直に謝り、俺は少し急ぎ足でその場から去る。

「ちょっと待ちなさい」

　が、もう終わりだと思っていたが、また会長に呼び止められる。

　いったい他に何かあっただろうか。

「え？　何かありました？」

「確かに私は今日のところは見逃すと言ったわ。でもそれは遅刻についてのことよ。もう１つの問題は解決していないわ」

　会長は籠に刺さっている彼女に目線を向ける。

「これは何かしら？」

　会長が遅刻の話ばかりにするから、この異様な光景を気にしていないと思い、話に出さなかったが、やはり気になるらしい。

　でもどう話したらいいものか……。

　あったことをそのまま言っても信じてくれないだろう。

　でもここは真実を話そう。

「これは……ここまで来る途中に空から落ちてきて籠に刺さったんですよ」

　俺は本当にあったことを集約して伝える。

　だが、当然信じるわけはなく、会長は先程よりも機嫌が悪そうな表情になる。

「あなたふざけているの？それとも何？ツッコミが欲しいの？私そういうのわからないからあなたがスベるだけよ」

　そんなこと言われても俺は真実を言っているだけなんだが。

「いや、ふざけてないですよ。俺は普段から真面目な方です」

「…………」

　会長が俺をじぃーっと見つめてくる。

　確かに俺はあまり真面目に見えないからって、そんな疑いの目で見なくてもいいのではなかろうか。

「まぁいいわ。でこの空から落ちてきた彼女は誰なの？」

「俺も今日が初対面なので、分からないですね」

「そう、でもこの服装から見て、うちの生徒でしょう。しかも、ネクタイの色があなたと同じ青色だから、彼女も新入生で間違いないと思うわ」

　会長は彼女の周りを見て回りながら推測する。

　確かに彼女のネクタイは青色。

　この学校では学年でネクタイの色が変わるようで、会長も赤色のネクタイを付けている。そのため、俺と同じ青色の彼女は新入生で間違いないだろう。

「春夏冬会長、そろそろ体育館に向かわないと時間がありません」

　会長の後ろにいた眼鏡の１人が会長に告げる。

「そう、分かったわ。先にあなた達が行って、準備を進めておいて頂戴。私も直ぐに行きます」

「「はい」」

　会長の指示に良い返事で答え、眼鏡５が去っていく。

　だが去っていく途中、足を止め、１人ずつ話していく。

「春夏冬会長、最後が重要ですから、絶対にこけないで下さいね」

「会長、ここ段差がありますから」

「砂利は滑りやすいですので、お気をつけを」

「…………（コクコク）」

「絆創膏はいつも通り私が持っているので～」

「五月蝿い！！　早く行けぇー！！！」

　紅葉のように真っ赤な顔になった会長が怒鳴り、眼鏡５を蹴散らす。

　ここまで心配されるなんて、いつも何があるのだろうか。

「まったくなんなのあいつら……」

　会長と目が合う。

「ごほん。今のは忘れて頂戴」

「はぁ……」

「この件はもういいわ。私も入学式の準備にいかなきゃいけないから。彼女は保健室にでも連れて行ってあげなさい」

「はい、最初からそのつもりだったので、とりあえず置いときます」

「保健室に誰もいなくても、不純異性交遊は許しませんから」

「し、しないですよ！」

　突然何を言い出すのだろうかこの人は。

「そう、ならいいわ。じゃあお願いするわね。えっと……そう言えば名前聞いてなかったわね。あなた、名前は？」

「えっと、俺は越前仁って言います」

「じゃあ宜しくお願いするわ。越前君」

　そう言うと、会長は急ぎ足で校舎の方へ歩き出す。

　そこで、俺は驚きの場面を目撃する。

　会長の足が何も無いところで躓き、バランスをくずす。

「きゃっ！！」

　会長が盛大に転ぶ。

　顔を地面に付け、お尻をこっちに突き上げるような恥ずかしい体勢になっている。

　その体勢だともちろん、会長の後ろにいる俺にスカートの中が見えてしまうもので、俺はしっかりとその瞬間を見てしまった。

「しろ……」

　それは、穢れを知らない真白な色だった。

　しばし地面に倒れていた会長だが、自分の身に起きている状況に気づき、会長は直ぐに起き上がる。

　そして、ばっと、こっちを見る。

「見た！！？」

　すごい喧騒に驚いて、少し焦り気味になってしまう。

「み、見てないです！！」

　会長はしばらく俺のことをじっと見、恥ずかしかったのか、またも顔を真っ赤にして校舎の中へと走って行った。

　あの眼鏡５が言っていたのはこのことなんだろう。

　あの言い方じゃあ、毎日のようにあんなことになっているのだろう。

「まぁー俺もそろそろ行こう」

　駐輪場に自転車を止め、ほど良く溶け、グダッとしている彼女をかかえ、俺も校舎に入っていく。

　春の暖かな光が体育館中を照らす。

　教壇の上では、小豆色のような変な色のスーツを身に纏った少し太めの校長が、５００人近い全校生徒を前に永遠にも思えるほど長い長い挨拶をしている。

　先程から、「最後に……」などと言っているが、一向に終わらない。すれよか、俺の耳が間違ってなければ、同じ話しをしているように聞こえる。

　１週間くらい前から話す内容を考えていたのかもしれないが、立ちながら聞くこちらとしてはいい迷惑だ。

　俺はといえば校長の話に飽き、ステージの垂れ幕にある何本ものしわを眺め、早く終わらないか待っている。

　周りを見るも大体の生徒も俺と同じらしく、目線が教壇以外にいったり、まさかの立ちながら寝ている者さえいる。

　校長からの話しは大体どこの学校でも長いと思うが、この学校は以上なのだろう。

　だって、先程から教頭らしき先生が時計を何度も見合って、冷や汗をたらしている。

　まったく困った校長だ。

　そんなことを思っていると、２０分以上は話していた校長の話は終わり、校長がステージを降りていく。

　すると、司会の無機質な声がステージ下のマイクを通して、スピーカーから響き渡る。

「生徒会長挨拶。生徒会長、春夏冬　槭さんお願いします」

　やっと、退屈な入学式が終わると思ったが、司会が言ったのは閉会ではなく、またもや挨拶のようだ。

　ステージ下の方から制服をびしっと着こなした女性が上がっていく。

　あれ？あの人……、さっきあった人だ。

　ステージ上にいるのは先程校門であった、俺をしかってきた人だ。

　どうやら本当に生徒会長らしい。別に疑っていたわけではないのだが。

　生徒会長は背の低い校長にあわされていたマイクの高さを直し、一礼する。

「おはようございます。生徒会長の春夏冬です。新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。本校は――」

　礼儀正しく挨拶をし、話し始める生徒会長の表情は、先程では見せなかった真面目な顔だ。

　その様子に少々驚いてしまう。

　話し方もしっかりし、さっきの人とは別人なのではないかと思ってしまう。

　それほどまでに、そこにいる生徒会長の雰囲気が違うのだ。

　先程は何かあったら噛み付いてきそうな動物の様だったが、今は凛とした花を思わせる。

　などと考えているといつの間にか、またお話しが終わっているようで、会長が礼をして壇上から去っていく。

　が、下りの階段に足を掛けた会長は普通には下りてはいかなかった。

　階段がいきなり倒れた。

「っ、きゃあ！！」

　女の子らしい悲鳴が響く。

　足を掛けた階段はステージと一体になっているものではなく、取り外し可能のやつだ。

　その階段は普通なら簡単には取れないが、まさかの会長が足を掛けた瞬間に取れ、階段が外れた反動により会長は、空中で逆上がりをするように一回転する。

　その見事なまでの一回転は綺麗に回転し、スカートが捲れることなく会長は床に着地する。

　うつ伏せで。

　一瞬のことに何が起ったのかわからないという顔の周りの生徒は、ざわめきだすでもなく静まり返る。

　そこに教頭があわてた様にマイクを取る。

「こ、これにて入学式を終わります。せ、生徒は自分の教室に戻ってください」

　体育館の入り口に立っていた先生方も、そのアナウンスにより我に返ったのか、扉を開けて生徒を誘導する。

　生徒は唖然としながらも歩き出す。

　まだ動かない会長の周りには、先生が集まり、保健の先生がどうのこうの話している。

　俺は自分のクラスの順番が来たらしく、俺も体育館を後にする。

　入学式が終わると１０分の休み時間らしく、今日から同じにクラスになったクラスメイト達は、席を立ったりして中学のときの知り合いとかと楽しそうに談笑を始める。

　俺はというと、クラスに知り合いがいなく、周りの席のやつらも知り合いであろう人と話をしているため、話す人がいないからただ一人で椅子に腰掛けていた。

　別に他のクラスに友達がいないという訳ではなかったが、殆どの生徒が教室から出なかったため、他の教室にいけなかったのだ。

　こういった最初のことは皆に合わせないと何かあったら面倒くさいのだ。

　次の時間はホームルームということで、休み時間が終わるのを俺は暇をして静かに待っていた。

　そう……静かに待っているのだが、さっきから俺の前の席でこっちををじぃっと見てくる人がいた。

「あの……なにか？」

　俺は前の席の耳にパイナップルのピアスをして、金髪でツンツン頭のどう見てもチャラいやつに話かけてみた。

　別に話しかけなくてもいいのだが、この１０分がとても暇だからだ。

　チャラいやつは、からかうでも、真剣でもない表情でこちらを見る。

「いや～暇でさ～今日は直ぐ終わると思って、何も持ってきてないからやることがないんだよ」

　だからと言って、こちらを見られても困るんだが……。

「確かに暇だな」

「君もこのクラスに知り合いがいないのかい？」

「ああ」

「この学校にも？」

「いや、いないわけじゃないけど、どうやら他のクラスにいるみたいなんだよね」

　そう、俺が遅刻して、じろじろ見られながら教室に入ってみると、そこには知らない人ばかりで、知り合いが１人もいなかったのだ。

　クラスが５つにも分かれているため、知り合いはみんなそっちに行ってしまったんだろう。

　俺の中学からは２０人近くここに来ているらしいが、ここまで会わないとは思っていなかった。

「ふ～ん、そうなんだ～」

「君こそ友達はいないのか？こうやって俺と話すより、友達と話した方がいいんじゃないのか？」

「ん～それがね～、この学校に同中いないんだよね～、み～んな他のところに行っちゃったからさ～、いや～心細いったらありゃしない」

「へ～、家ここら辺じゃないのか？」

「ああ、ここには電車で来てるんだよ」

「ふ～ん」

　この学校は他の学校と比べ、設備や教育がしっかりしているということで、遠くからわざわざ来るというのは珍しくないらしい。

　だが、そういい人はちゃんと勉強がしたいとかそういう人が多く、いかにもチャライやつが遠くから来るとは珍しい。

「でさ～君なんで、遅刻してきたの？」

　自分の話が飽きたのか、唐突に別の話しに変えてくる。

「ただの寝坊だよ」

　いろいろ説明するのが面倒だった俺は、なんとなくごまかしてみた。

「え～つまんな～もっといいエピソードとかないのかよ」

「なんだよいいエピソードって」

「ほらあれだよ。空から女の子が降ってきて、いろいろ巻き込まれたりとかさぁ～学園物なら定番だろ」

「そ、そんなことあるわけないだろ」

　内心ギックっとしながらも、普通にごまかす。

「だよな～そんな漫画やアニメの世界で起るようなこと、あるわけ無いよな～。でもあったらいいよな～」

　自転車はボロボロになるし、遅刻するし、まったくいいことはないけどな。

「でもただの遅刻か～面白くないな～」

「俺に面白さを求められても困るよ」

「いや面白さは大切だよ。こんなご時世なんだからさ楽しくいかなきゃ」

「じゃあお前はなんか面白い話とかもってるのか？」

「もち。ありありだよ。なにせ前の学校では『周りの７０％は何でも知っている情報屋』として通ってたからね」

　それはすごいのか分からないが、パイナップルは自信満々に胸を張って言いながら、懐から手帳のような形のスマホを取り出す。

「今のところ良いネタはこれかな……」

　パイナップルは慣れた手つきでスマホを操作し、何かを探していく。

「さっきお前も見た、この学校の生徒会長の噂が面白いかな」

　そういうとスマホの画面をこちらに見せてくる。

　そこには、かなり遠くから撮られたのであろう少しぼやけた、生徒会長の写真が映っていた。

　確かに、会長のことは気になる。

　まだ、あって半日も立っていないが、今のとここの学校で一番気になっている人だろう。

「本名、春夏冬槭。スポーツ万能、成績は常にトップ、男子生徒からは熱狂的な指示を受け、女子生徒からも信頼されている超人。しかもこの学校の理事長の孫らしい」

「へぇーあの人そんなにすごい人だったのか」

「でも１つ欠点があるんだってさ」

「欠点？」

「なんでもドジッ子キャラで、最初はいいらしんだが、最後に必ずミスを起こすんだと。この前も生徒会の会議で決まった資料集を、転んだ拍子に開いてた４Ｆの窓からフライヤウェイして、バラバラにしたらしい」

　なんと、そんなことまであったのか、４Ｆからフライヤウェイって、なんで生きてんだ？

「俺も最初はこの情報は嘘だと思ってたんだけど、さっきのあれを見て真実味が出てきた。なんで生きてるかは知らんけど」

「本当にすごかったなあれは、人間があそこまで綺麗に空中を回転できるとは思ってなかったよ」

「だよな、だけど話しはまだあるんだよ。耳の穴を広げて聞けよ………あ」

　パイナップルはまだ話しをしようとしていたが、何かに気づいたように中断する。

「あ、そういえばまだ、名前言ってなかったな。ゴホン、ゴホン。俺、兎継義翔太って言うんだ。中学の時は『うっちー』って言われてたから気軽にうっちーって呼んでくれ」

「ああ」

　そういえば俺も名前を聞いてなかった。わかんなかったから、ついパイナップルって呼んでたな。

「……」

「……」

「で？」

「え？」

「いや、俺名乗ったから次君が名乗るにきまっとるやないかい」

　あまりに、ホストみたいな決め顔で言われたものだから、思考が固まってしまった。てかなんで関西弁？

「あ、ああ、俺は仁。越前仁って言うんだ。別にあだ名は無いから仁でいいよ」

「おう、よろしくな～仁」

「おう」

「お、いつの間にかもう１０分経ちそうだな」

　言われて、黒板の上あたりにある時計を見ると、長い針があと１分で天辺につきそうなところまで行っていた。

　すると、今までガヤガヤと集っていた生徒達が席についていく。

「じゃあ話はまた後でだな」

「ああ」

　そう言って兎継義は身体の向きを前に戻した。

　そして、殆どの生徒が席についたところで、予鈴のチャイムが鳴り始める。

キーンコーンカーンコーン　ガラッ

　そして、予鈴が鳴り終わると同時に教室の扉が開く音が響く。

　教室の扉が開くと、眼鏡をかけた金髪の外人が入ってきた。

　その外人は真っ直ぐ教卓に向かい、黒板に背を向けて話し始める。

「おはようございます。今日からこの１年Ａ組の担任になりました。ジャスティス・ロウ・マランツァーノです。『ジャスティス』と呼んでください。私は見ての通り日本人ではなく外人ですが、受け持っている教科は世界史ですので英語の先生と間違えの無いようにお願いします。みなさんこれからよろしくお願いしますね」

　一切の汚れもない真白なスーツを着たジャスティス先生は、銀色に光る眼鏡をくいっと上げ、真顔で淡々と自己紹介をする。

　その姿がイケメンの金髪外人なので、周りがざわつきだす。

　特に女子生徒達が何か黄色い声をあげているが、ジャスティス先生はそれに応えるように、微笑み返してあしらう。

「それでは出席を取りますので、返事をお願いします。兎継義さん」

「はい」

「越前さん」

「はい」

　俺は普通に返事をする。

　俺の返事の後もジャスティス先生はなれたように、どんどんと進めていく。

　その動きを見ている限り、無駄な動きがない。

　普通の教師なら、ここで予断が入ったりして、仕事を遅らせたりしているのを見たことがあるが、この先生にはそれが一切ない。

　着ている白いスーツの通り、きっちりとした性格なのだろう。

　俺は顎を腕で支え、ぼーとする。

　俺の番号は２番のため、直ぐ終わる。

　そのあとは終わるまで時間がかかるため、暇なのだ。

　朝の出来事を思い出す。

　落ちてきた女の子。

//どの高さ？

　あの高さから落ちてきたのに、強打したであろう頭は傷どころか、たんこぶすら出来ていなかった。

　いったい何者なのだろうか。

　保健室に連れて行ったが先生がいなかったため、ベットに寝かせてきたが大丈夫だろうか。

　学校が終わったら一応見に行ってみよう。

　昼になり、ホームルームが終わったクラスから続々と下校を始める。

　今日は入学式のため、学校は午前だけらしい。

　俺はと言うと、今朝落ちてきたあの子の様子を見るため保健室に向かっていた。

　保健室は１年生の教室の下にあるため階段を下りるとすぐにつく。

こんこん、ガラガラガラ

「失礼しま…あれ？誰もいない」

　ノックをして保健室に入るが、いるはずの先生はおろか、あの子もいなく、蛻の殻だった。

　あの子を置いたベットは誰かがいたであろう形跡があるもののあの子の姿は見当たらない。

「もう帰っちゃったのかな？」

　さすがに昼まで寝ているわけがないと思っていたが、空から落ちてきて気絶したことがないから、普通どのくらいで起きるのか検討もつかない。

　一応見に来たがいないようだし、そうとわかればここにいる必要もないため帰ることにする。

　俺は保健室を後にした。

ガラガラガラ

「ちょっとそこの君」

「ん？」

　保健室から出ると、不意に呼びかけられる。

　俺は声のする方へ視線を向ける。

「って今朝の越前君じゃない」

　廊下の先からこっちに向かって生徒会長が歩いてくる。

　膝には入学式のあれのせいか、今朝にはなかった絆創膏をしている

「誰かと思ったら生徒会長ですか。どうしたんですか」

「今朝の娘はまだ保健室にいるかしら？」

「いえ、いないからもう帰っちゃったんだと思います」

「そう、事情を聞きたかったのだけれども」

「事情？」

「ええ、いろいろと聞きたいことがあったのよ」

「今朝のことですか？」

「まあそんなところね。でも、いないならいいわ」

　確かに朝の俺の証言じゃ具体的には分からない。

　本人に聞くのは当たり前か。

「はあ」

「私はまだやらなきゃいけないことがあるから失礼するわね。もしもだけどあの娘を見かけたら、私が探していたと言っておいて頂戴」

「あ、はい」

　そう言うと生徒会長は後ろを向いてすぐさま去っていった。

　俺ももうここには用事は無いし、壊れた自転車を直さないといけないから帰ろう。

　下駄箱に行き、靴を履き替えて駐輪場に向かう。

　そして俺は目の前の光景を見て大きなため息をつく。

「はぁ～～～～」

　だが、この光景を見てしまえば誰だってため息をついてしまうだろう。

　今にも落ちそうな籠、歪な前輪、グニャっと曲がったフレーム、空気のないボロボロになったタイヤを晒した自転車が、新品の用な自転車が沢山並んでいる１年生の駐

　輪場で異様な空気を出して止まっているのだから……。

　夢であって欲しいと本当に思う。

　だけど、だからと言ってこんな姿になっても捨てることはできない。

　俺はボロボロな自転車の籠に鞄を落ちないように入れて自転車を押す。

キィー、ガタガタ、ガコン、キィーーー

　すると、前輪がガタガタと騒音を出すので、帰宅途中の生徒達がこちらを異様な目で見てくる。

「まぁこんなに不快な騒音を出せば目立つよな」

　沢山の生徒の目線が気になり、俺の足は少しずつ早足になって行く。

　あまり人の目を気にしない俺でもさすがにこの人数の視線は別だ。

「早く帰ろう」

　そう言って騒音をさせながら校門を出て左の山方面に向かって歩く。

　山方面に行く生徒は少ないというか、いないため、校門を出ると沢山の視線はなくなった。

　なにせこっちの道には山を登る道しかないため、山に家がある俺の他は滅多に通る人はいない。

　通るとすれば、この山にある神社に行く人ぐらいであろう。

「それにしても、自転車を押して登ると結構きついな。タイヤが壊れて進み難いし、自転車が壊れてなかったらな～、はぁ～」

　俺はそんな独りごとを言いながら、もくもくと山を登って行った。

「やっとついた～」

　山を登り始めて約４０分くらいでようやく家についた。

「じゃあ早速自転車を直そうかな。と、その前に、あいつ帰ってきてるかな？」

　自転車を一旦車庫に置いて来てから、玄関を覗いて靴を確かめる。

「ん…どうやらまだ帰ってないようだな。よし、今のうちに直すか」

　車庫に戻り、制服の上着を脱ぎ、長袖の裾を捲くって、作業しやすいカッコになる。

　そして、ここまで押してきた自転車に向かい合う。

「う……」

　が、あまりのボロさに買いなおした方がいいかもしれないと思ってしまう。

　だが、俺はこいつを捨てることはできない。

　こいつは、これまでいつも一緒だった俺の相棒で、他の自転車とは違う特別な自転車だ。

　こいつに代わりはいない。

　最初は自転車に興味はなかったが、この自転車と出会ってから俺の人生は変わった。

　あれは３年前のまだ肌寒い春のことだった。

　そのころは周りの友達の影響で俺はガン★ムに興味を持つようになった。

　特に貴之君がよく作っていたガン★ラがかっこよくて欲しいと思った。

　だから、やっと貯まったお小遣いを手に握り締めて店に向かった。

　だが俺は店に向かう途中、通りがかったホームセンターヨンデーの前で２,０００円で売られていた一つの自転車に心を奪われた。

　どこにでもありそうなごく普通の自転車なのだがどこか惹かれるものがあり、俺はガン★ラを買うはずだったお金ですぐさまその自転車を買った。

　通常壱万円以上するであろう自転車が結構な安値で売られていることや店の定員が『やめたほうが……』とか『私は止めましたからね』などと言っていたが、俺はすごい胸のトキメキであまり気にすることはなかった。

　そして、乗ったときのあの風になった感じがたまらなかった。

　それからというもの俺は、自転車に乗ったり、整備したりとしているうちにどんどん自転車が好きになってしまい、自転車のために道具を集めたり、知識を結構身につけてしまったのだ。

　そのため今では、自転車屋よりも優れていると思っている。

　おっと、思い出に浸って手を動かしてなかった。

　あいつが帰って来る前に終わらせないと、また、何を捨てられるか分からない。

　俺は自転車に集中し直す。

「よし、タイヤは前に買ったのがあったはずだからそれを使うとして、籠はどうしよっかな～あ～、そうだ、針金で応急処置しよう。で、下のフレームのところは溶接すればなんとかなるだろう。じゃあはじめるか～」

　車庫の奥にある工具道具や、少しでかい黒ずんだ溶接機を取出してきて作業を開始する。

　ガシャ　ガシャ　チィィィィーー

「ふ～、フレームはなんとかなりそうだな、溶接部分も綺麗にくっついたし、次はタイヤかな」

　もう使わない溶接機を車庫の中にしまい、奥にあるスペアのタイヤを取りに行く。

　すると…

「壊すの？」

「っわ！？」

ゴン！

　工具類の奥から突然の声にビックリして、近くにあった工具類に足をぶつけた。

「いっつー！！」

「……？」

　奥から、鮮やかな桜色の着物を着た、小柄な少女が出てきた。

「な、なんだ、裂楽（さくら）か、ビックリした～、いつからそこに……」

　車庫の置くから出てきたのは、この家の主である南十字（みなみじゅうじ）裂楽だ。

　なんでか知らないが、左目に包帯をした、病人の様に肌白い弱々しい女の子だ。

　俺は赤ん坊の頃、この裂楽のお祖父さん、南十字亞琉狗（あるく）に拾われた。

　それ以来、俺は裂楽と兄妹の用に育てられ、今に至る。

　俺を拾ってくれた亜琉狗お祖父さんは、女を追いかけてどっかに行ったらしい。

　そして、変なお祖父さんに育てられた裂楽は、いつもよく分からないことを言ってくる。

「仁がその瓦落多をくっつけ始めたところ」

「ガラクタじゃないよ、俺の相棒だ。それに溶接し始めたの結構前なんだけど……、ずっとそこにいたの？」

　裂楽が小さくコクコクと頷いてくる。

「何…してたの？」

「仁を見てた」

　うん、よくわからない。どうゆうことだ。

「そ、そうなんだ。何か用だった？」

「用がなかったら仁を見てちゃだめなの？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

　普通見ないと思うんだけどな…。

「ごほん、ごほん……、あのね」

「うん」

「おかずが無いの」

「ん？」

「おかず……夕食のおかずがないの」

「じゃあ、俺が買ってくるよ。何を買ってくればいい？」

「お金も…ないの」

「え？あ、あははははは、冗談きついな～そんなわけ……」

「ないの」

「………」

　いったい裂楽は俺に何をさせたいのだろう。

「ないの」

「ど、どうしろと？」

「………（すー）」

　裂楽が俺の後ろにある森に目線を向ける。

　いや……まさかな。

　この山に食べ物は捨てるほどある。

　だが、まさか……取って来いとは言わないだろう…。

「えっと…」

「採ってきて」

「…………」

「採ってきて」

「………………」

「あ～、今日は食べ物がないから私、餓死しちゃうのかな～（棒読み）」

　裂楽は無表情のまま棒読みで心にも無いことを言いながら、俺の目を見つめてくる。

「……………」

　しょうがない行くしかないか……。

「行ってきます……」

「行ってらっしゃい」

「はぁ～」

「ゆっくりでいいから」

　裂楽のそんな言葉を背に、大きな竹の籠を持って俺は家を出た。

「……………あっ」

　辺りが夕焼け色に染まり、黒になりかけてきた頃、俺の目は眩しい太陽により目覚めた。

「やばっ！寝てた！しくったな～今何時だ？」

　そう言いながら、傾きかけている太陽を見る。

「１８時くらいかな？」

　今晩の夕食を調達しに来た俺は、魚釣りをして５匹ぐらい釣ったら帰ろうと思っていたのだが、川に糸を垂らしているうちに寝てしまったようだ。

　早く帰ってペガサスを直そうと思ったんだけどな……。

「早く帰らないと裂楽が腹空かしてるだろうしな」

　いつの間にか２匹釣ってるが、よく考えたら裂楽は魚が大の苦手だ。身体によくないと言っているが、聞く耳を持ってくれない。

　てか、なんでそのことが分かっていて、俺は釣りを始めてしまったんだろうか。いつの間にか寝てるし疲れてたのかな？

「少し物足りないかもしれないけど、山菜か何かとって帰ろう」

　春だから蕗のとうなどの山菜が沢山あるだろう。

「おっ、早速そこに、ゼンマイ科のシダ植物。原野や山地に生え、葉は長さ約７０㎝の羽状複葉。若葉は葉柄とともに渦巻状に巻き、綿毛に覆われ、開く前に採って食用とする、美味しそうな薇が」

　俺は川の先にある薇に向かって、大きくジャンプして川を飛び越え、早速持っていた籠に薇を入れる。

「お！こっちにも」

　この檻須袈山は沢山の食べ物に恵まれていて、山の２/３は南十字家の土地のため、いくらでも採っていいことになっている。

　残りの１/３は神社をやっている、神羅とかいう家のものらしい。

　神羅家の人がこっち側に来ることはなく、会ったこともないのだが、家が仲いいという話を聞いたことがある。

　特に、亜琉狗お祖父さんと神羅家のお祖父さんは、昔何か一緒にやっていたらしく、とても仲がいいらしい。

　そのため夏になると、こっち側では採れない筍を籠いっぱいにくれるのだと、裂楽が言っていた。

　本当にこの檻須袈山は、食べ物に恵まれていると思う。

「お～、なんかとげとげした枝があると思ったら、たらの芽があるではないか、天ぷらにすると美味しいんだよな～」

　枝の先についている、芽のようなものを捥ぎ取り、どんどん籠に入れていく。

「よし、このくらい集まれば良いだろう」

　気づけば、籠の中は半分以上も山菜で埋まり、２人分の夕食には少し多いくらいになっていた。

「裂楽はあんまり食べない方だし、このぐらいにして帰ろう」

　背負っていた籠を担ぎ直し、来た道を戻る。

　そのとき……

「ん？」

　この山であまり見ないものが、木々の向こうにあるのを視界の端に捉え、戻ろうとした足を止める。

「明り？いや、このゆらゆらとした暖かいオレンジ色は、焚き火かな？」

　何でここに明かりがあるのか分からないが、俺は不思議と明かりに方向に向かって行く。

「こんなところに小屋？」

　明かりの先にあったのは、最近できたような小さな小屋。

　この山には家と神社しかないはずなのに、そこには、どちらでもない小さな小屋のようなものが見て取れた。

　こんなところに、小屋なんてあったか？俺の記憶には無い。

　小さい頃から何回も来てるため、山の中は殆ど記憶している。

　だが、俺の記憶の中に小屋と思われるものはない。

「いったいいつできたんだ？」

　なんとなくその小さな小屋が気になり、小屋に近づき、ドアを開ける。

　その刹那、焚き火によって写しだされていた俺の影以外に、もう一つ、人型の影が揺らめいた。

　俺は嫌な気配を感じ取り、振り向くよりも先に、横に飛んだ。

「っ！？」

　ヒュン！　ゴス！！

　すると、さっきまで俺がいた場所に、殴るにはちょうどいい木の棒が振り下ろされていた。

「チッ、はずしたか」

　棒を振り下ろした者から聞こえてきたのは、どう聞いても俺に殺意を持っている言葉だった。

　だが、その言葉よりも俺は、木の棒を振り下ろした奴に驚いた。

「女の子？」

　そいつは、今にも光出しそうなほどに輝いている綺麗な黄緑色の瞳をし、茶色の長い髪を大きなリボンで束ねた女の子、それよりも驚くのは着ていた服の方、俺と同じ月高の制服だった。

　まさか、同じ高校の奴に襲われるとは思ってもいなかった。

「うん？」

　しかし、それだけではなかった。

　俺はこの子を知っているような気がした。

　昔ではなく、最近。

　思い出したくないくらい、おかしな、最悪なこと。

　………………………………………………

　………………………………………………

　………………………………………………

　……………………………………………あ。

「あああああああああああぁ～～！！」

　あった。俺はこの子を知っている。

「君は今朝の……」

　顔が影に隠れて最初は分からなかったが間違いない、あの大きなリボンに、あの顔。

　今朝、空から落ちてきて、俺のペガサスを壊したあの彼女だ。

「貴様も奴らの仲間か？」

「え？」

　彼女は小さな声で何か言ってきたが、余りにも突然すぎて聞き取れなかった。

「貴様も奴らの仲間なのかと聞いている！」

「なんのことだよ」

「惚けるな！そんなみえみえな嘘をついてもだめ。その身のこなし、私の攻撃を見ずに避けたのがその証拠。普通の人間が避けれるはずが無い。それにこの気配、普通の人間ではないことは明確。ふふふ、昨日みたいに私を消しに来たんでしょ？そうはいかないわ、昨日は油断したけど、今日はこっちから殺してやる！成敗！！」

「わ！ちょまっ！？お、俺知らないよ、人違いだよ」

　聞いてきたくせに、彼女は問答無用で木の棒を振り回しながら襲ってくる。

　だがそれは、つづくことはなかった。

「うるさい！この……」

　ぐぅ～～～～～～～～～

「ん？」

　襲い掛かってた彼女のお腹の方から、間の抜けた音が鳴った。

「え、えっと…腹減ってるのか？」

「ち、違う！こ、これはお腹の音じゃ……」

　ぐぅ～ぐぅ～ぐぅ～～～～

「う……………」

　連続で鳴った腹の音が止むと、彼女はゆっくりと地面に倒れた。

「お、おい！」

「お腹が……」

「お前、動けなくなるくらい腹減るってどういうことだよ」

「うにゅ～～～」

　空腹のためか、変な声を出す彼女。空腹でもその擬音が出るのかと思うところがあるが、一旦置いておく。

　このまま放っておくのも可哀想だ、さっき採ったもので何か作ってやるか。

　裂楽はそんな食べないし、俺も今日はそんなに腹は減ってないから、少しぐらい減っても問題は無いであろう。

「はぁ～ちょっと待ってろよ」

　調理するために彼女から離れ、焚き火の方に向かう。

「う…動くな…」

「ん？」

　焚き火の方に行こうとしたところで、動かなかった彼女が首だけをこちらに向けて、何か言ってくる。

「そこから動くな…動けなくなった私に止めを刺す気でしょ？分かってるんだからな…」

「大丈夫だ、俺は君の敵じゃない、ただの君の同級生だ。この制服見れば分かるだろ？」

「そんな服が何の証拠になる。服はただの服、奪えばどうとでもなる」

「はい？なわけないだろ」

「じゃあ、なんでここにいる。こんな山にその同級生が来るわけない。この山に人なんて入ってこなかったぞ。だから、ここにいる時点で怪しいのよ」

「あのな、俺この山に住んでるんだよ」

「え？住んでる？」

「そう」

「この山に？」

「ああ」

　彼女はしばらく考える姿勢をした後、なにか気づいたように「……あ」と言い、何故か哀れむ顔をしてくる。

　いったいどうしたのだろうか。

　俺の話にそんな行動するところなんてあったのだろうか。

「どうした？」

「いや、お前ってあれなのか、ホームレーズンとか言う家のない可哀想な人？」

「それを言うならホームレスだろ？しかも俺にはちゃんと家がある。この山が家の私有地なんだよ」

「う？」

「つまり、この山に俺の住んでる家があって、この山がその家の物ってこと」

「え？山に持ち主なんているものなの？」

「そりゃいるだろ」

「そうなのか」

「で、俺が君の敵じゃないって信じてくれたか？」

「…………………………。ほ、本当に、私を殺しに来たんじゃないの？」

「ああ」

「……………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………」

　彼女の目が俺の目をじっと見つめる。

　しばらくの沈黙。

「……分かった」

　あまりにも沈黙が長かったため、どうなるかと思ったが、どうやら信じてくれたようだ。

「よし、じゃあ少し待っててくれ」

　俺はそう言うと背負ってきた籠の奥から、念のためいつも入れていた鍋とサラダ油を取り出し、鍋の中に油を入れ、焚き火の方へもって行き鍋を火にかける。

　油を温めている間に、籠から採ってきた山菜を取り出し、近くの川で洗ってくる。

　そうしているうちに、油が良さそうになってきたので、山菜に持ってきていた小麦粉をつけて油で揚げる。

「すん、すん、うにゅ～いい匂いがする～」

　いい狐色になったところで、油から取り出し、塩を塗して皿に盛り付ける。

　そして次に、魚の鱗と内臓を取り、塩を塗し、さっきと同じように小麦粉をつけて油にあげ、皿に盛り付ける。

　魚を取ってきたはいいが、裂楽は魚を食べないため、自分の分だけ残しておけば足りるであろう。

「はい、どうぞ」

「………これ、食べれるの？」

「あたりまえだろ、食えないものをこの状況で出すわけ無いだろ」

「ふむ」

「まぁ、あんまり料理とかしないから美味いか知らないけどな。まあこういうのは素材の味で誤魔化せるものだ」

「では、頂きます。はむ」

　そう言うと彼女は、魚を手に取り真ん中からかぶりついた。

「うにゅ！？……はむ、はむはむ、はむはむはむはむはむ」

　変な声をあげて、食べる手が止まった。と思ったら、また魚にかぶりつき、いっきに平らげてしまった。

　彼女は魚を食べ終わると、先程までの緊迫した顔から満面の笑みに変わっていた。

　どうやら、口にあったらしい。

「なあ、君いったい何食べてたんだよ。いや、ご飯自体食べてたのか？」

「ん…ごくん、一応食べてた。なんかよくわからない木の実とか根っ子のような植物とか？」

　彼女は応えてくれるのだが、食べる手を止めずに山菜を食べている。

「なんでそんなもん食ってんだ？美味しくないだろ」

「ここら辺にあるものは、見たこともない物ばかりで、私にはどれが食べられるのかわからなかったの」

「珍しいな、普通見たことあるようなものばかりだけどな、君、ここら辺の人じゃないのか？」

「うん」

「どこから来た？」

「遠いところ」

　遠い所とはどこか、なんでそこから来たのか、聞いてみたかったが、言った彼女の顔が一瞬、思い出したくないことでもあるように暗くなったのを捕らえ、自然と聞こうと思った俺の思考は止まった。

　きっと何かあったのだろう。

「ふ、ふ～ん、遠いところなのか」

「うん、２ヶ月前くらいにここに来て、前住んでたところに少し雰囲気が似てて、だから、この山に住もうと思って家建てて住んでた」

「え、これ君が建てたの？」

「うん、ここら辺の木を使って２日ぐらいかけて造った」

「意外と器用なんだな、それにしても２日って早くない？」

「そうなの？私の知り合いは皆そのくらいで造ってたし、半日で造る人もいたから普通だと思うけどねー」

　俺の知ってる限り、そんな超人知らないけど、世界は広いってことなのだろうか。

「ふ～ん、凄いんだな」

　そうしているうちに、いつの間にか皿の上には綺麗に骨だけにされた魚だけが残り、魚の身や山菜も一つ残らずなくなっていた。

「ご馳走様でした」

「綺麗に食べたな…」

　それ程にお腹を空かしていたのだろう。食べ終わった彼女の顔は満足げだ。

「そうか……どれが食べれるのかわからないんだもんな」

　こんなところで、飢え死にされても困るしな、仕様が無い教えてやろう。

「よし、ここで倒れられても困るから、簡単に食べれるやつを教えてやるよ」

「いいの？」

「ああ、女の子に餓死させるわけにはいかないだろ」

　そういいながら、辺りを見渡す。

　すると、茂みの中に小ぶりだが、美味しそうな赤い実を実らせた山苺を見つける。

「ここら辺は、そうだな、これとか食べれるけど、苺も知らないのか？」

「イチゴ？この赤いブツブツのついた実のこと？」

「そうそれ、山苺だから甘いか分からないけど、普通のは甘くて美味しいんだよ」

　彼女は犬のように苺の匂いを嗅いだあと、恐る恐る口に入れる。

「っん！！ふむ酸っぱいようで甘くて美味しい！」

　そういいながら、また１つ口に入れる。

　どうやら気に入ったらしい。

「他にもそうだなあれとかかな」

　俺は近くにある、食べれそうなものを彼女に教えていく。

　彼女も生きるためなのか、すごい真剣に聞いている。

　この森は毒系の植物が少ないため、少し教えるだけで何とかなるだろう。

　大体教えた辺りで、俺は家に帰ることにした。

　別にもう少し教えていてもよかったのだが、裂楽をあまり待たせるわけにはいかない。

　まあもう結構待たせてしまっているんだが……。

「それじゃあそろそろ帰るよ」

「うん」

「寝るときは火、消してね、火事になったら洒落にならないから」

「任せておけ、火の扱いは慣れている」

　彼女に背を向け、焚き火の明かりから遠ざかる。

　が、ふと大事なことに気づき、俺は足を止める。

「あ、そう言えばさ」

「う？」

「君の名前は？」

「私の名前？」

「おう」

「ふん、名を尋ねるときはまず自分から？と教わってこなかったの？」

「なんで、疑問系だよ。まあいいか、俺は越前仁、仁でいいよ」

「仁か…覚えやすい名前」

「まあね。はい、俺言ったから、次君ね」

　彼女は胸をはり、どうどうとした感じになり、『ゴホン』と咳払いをして告げてくる。

「私の名前は、ル…じゃなくて」

「ん？」

　彼女は間を空けたのに、間違ったのか、何かを言い淀む。

「土井殺袈よ。好きなように呼んで」

「……………」

　まさか、名前に殺すって入ってるなんて、名前をつけた親は、そうとう病んでるみたいだ。

　キラキラネームではなく、これではイタイタネームだ。

　いや、その前に苗字の方がどっかで…

「ん？土井？」

「…？うにゅ、そうだよ？」

「どっかで聞いたことあるような…気のせいか」

「……？」

「いや、なんでもない。じゃあまたな殺袈」

「うん、またねー」

　俺は少し急ぎ足でもと来た道を戻っていく。

　すると、結構戻ったあたりで、妙なものを見つけ立ち止まる。

カサカサ

　草木を揺らす小さな赤いもの。

　この森ではキノコ以外にあまり見ない鮮やかな赤。

「珍しいな、なんだろ？」

　赤い物体の近くでしゃがみ込み、よく観察する。

「これってもしかして蟹？でもなんでこんなところに何で蟹がいるんだ？川なんてここら辺にはないはずだけど」

　こんな蟹は初めて見た。ここら辺では見ない蟹だ、外来種だろうか。

　足元の蟹を見ていると、後ろからもカサカサという音がし、振り返るとそこにも蟹が。よく見ると俺の周りには結構な量の蟹がいる。

　川なんてまだ先にあるのに珍しいこともあるものだ。

　これがこの蟹の特徴なのだろうか。

　俺は不思議になりながらも急いで帰路についた。

　俺が家につく頃になると、辺りは暗くなり、星と月が夜空を照らしていた。

　家はというと、静かながらも暖かい明かりがついている。

「かなり遅くなったな、裂楽怒ってるかな」

　俺は恐る恐る玄関の扉を開けて中に入る。

「ただいま～」

　……………

　無言。

　いつも、『おかえり』とか、なにか返事を一言でもしてくれるはずだが、声は聞こえず、かちゃかちゃと何かが接触する音が聞こえるだけだった。

　そのためか、いつもの廊下が不気味に感じてしまう。

「う……」

　俺は玄関に立ち止まるが、ここにいても仕方がないため、裂楽がいるであろう居間に向かう。

　居間の襖の前で止まり、一呼吸おいて襖を開ける。

　暖かい光と空気が、開けた襖の間から漏れてくる。

「た、ただいま。ごめん遅くなっちゃ……」

　居間にはいつも通り、裂楽が囲炉裏を囲むように座っている。のだが、その手元と目前に思ってもいなかったものを発見する。

　俺は固まった。

「………え？」

　裂楽の目の前にはこの家にあるはずの無い、ないからこそ俺が採りに行ったご飯が○○に美味しそうに乗っているではないか。

　そうか、食事中だから返事ができなかったのか。

「ご飯あるじゃん……」

「探したらあった」

「えー」

「食べないの？」

　裂楽が当たり前のように話してくる。

「いや、食べるけど……俺が行った意味なかったな」

　俺は背負っていた籠をその場に置き、俺の分のご飯が置いてある所に座る。

　上がっているのは、豆腐の味噌汁、秋刀魚の塩焼き、大根の漬物、白飯と質素な夕食。

　質素ではあるが、朝からパン以外食べていない俺の胃袋には嬉しいご飯だ。

　まあ当然、魚が嫌いな裂楽のおかずは俺と違い、野菜ばかりだけど。

「いただきます」

「うん」

　いつもこんな感じで、俺は調子を崩される。

　ずっとこうだから慣れてはいるが、きついものだ。

　だけど、裂楽が作ってくれるご飯はいつも美味しい。

「おいしいな……」

「………」

　裂楽はご飯を食べているときはいつも静かだ。

　別にいつも五月蝿いわけではなく、いつも静かなのだが、ご飯を食べるときはいつも以上に静かになる。

　五月蝿い方がいいってことではないが、昔からこうなため、喋るのは俺でけで、はたから見れば１人事を言っている用に見えるだろう。

　そうこうしているうちに、質素なご飯は○○の上にはなくなっていた。

「ご馳走様でした」

「………」

　声に出して言う俺を裏腹に、裂楽は静かに合掌する。

　その姿が神々しく見え、少し綺麗に見える。

「何？」

「あ…なんでもない」

「？」

　いつの間にか見つめていたようだ。

「じゃ、じゃあ俺風呂入るわ～」

「うん」

　風呂に入り、自分の部屋に入ると、さっそく布団を敷いてダイブする。

「今日はもう寝るか……」

　本来なら、自転車を直さなきゃいけないのだが、今日はいろんなことがあって疲れたため、俺の身体は眠りを求めていた。

　それに、自転車はまだ他にもあと２台あるため、急ぐ必要はないであろう。

　そう思うと、俺の意識は遠くなり、いつの間にか深い眠りについた。

　暗闇に染まる山。

　月が出ているはずなのに、その光だけではこの暗闇を照らすことができないほどの暗さ。

　そんな山の奥深くに３人の人影。

「奴はいたか？」

「いんやー、見当たらねー」

「……（ふるふる）」

「

「「はっ。すべては我らのマザーのために……」」